

# 〔連載〕『凛々たる人生』

— 志を貫いた先人の姿 —

## 〔第十五回〕日本の精神を世界に伝達した 岡倉天心

東京大学名誉教授 月尾嘉男

### 東京美術学校の創設

東京の上野公園の北側に存在する東京藝術大学は一八八七（明治二〇）年に創設された東京美術学校と東京音楽学校を第二次世界大戦後の一九四九（昭和二四）年に統合して実

現した大学である。いずれも江戸時代から明治時代へ日本が移行した時期に、西洋の文化を導入しようとした文明開化を象徴する学校であり、現在でも演奏可能な日本最古のパイプオルガンが存在することでも当時の政府の意欲が実感できる。

今回は、この東京美術学校を創設した岡倉

岡倉天心（1863-1913）



天心（本名は覚三）を紹介する。天心の人生は波乱万丈であるが、若年の時期から普通ではなかった。父親は福井藩士の岡倉勘右衛門であるが、開国直前の世情調査のため、藩命によって武士から横浜に開設された商館「石川屋」の商人となっており、天心はその商館で一八六三（文久二）年に誕生した。しかし天心が九歳になったとき母親が死亡したため付近の長延寺で生活することになる。

そこで漢籍を学習するとともに、横浜の外国人居留地に滞在していた宣教師J・H・バラから英語も習得した。一八七二（明治四）年の廃藩置県によって「石川屋」は廃業となったため、一八七三（明治六）年に父親が東京の日本橋蛸殻町で旅館を開業し、一家は東京に移転した。そのような経緯から東京外国語学校（東京外国語大学の前身）に入学、さらに二年後の一八七五（明治八）年に東京開成学校（東京大学の前身）に入学した。

そこで出会ったのが大森貝塚の発見で有名なアメリカの動物学者E・S・モースの紹介で、一八七八（明治一一）年に来日したE・F・フェノロサである（図1）。哲学や政治が専門であるが、東洋美術にも造詣のある学者である。その背景には一八八九（明治二二）年に発布される大日本帝国憲法起草した一人である政治家の金子堅太郎とフェノロサがハ

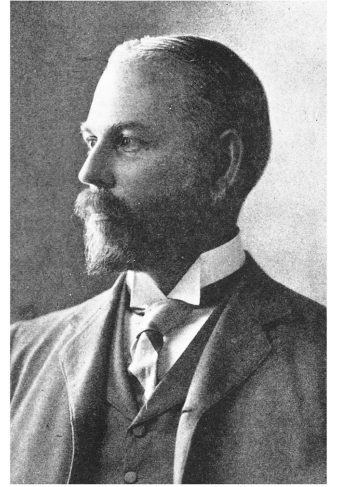


図1 E.F. フェノロサ (1853-1908)

ーバード大学の同窓であり、その影響で日本美術に関心があったという事情がある。

来日したフェノロサは前年に創設されたばかりの東京大学で教授として東洋美術を研究するとともに講義をした。その講義を受講したのが柔道の父とされる嘉納治五郎、東京大学で日本人初の哲学教授となる井上哲次郎、早稲田大学総長となる高田早苗、小説『当世書生気質』(一八八六)で有名になる作家の坪内逍遙などとともに天心であった。それら

の人々のうち、フェノロサに最大に影響されたのが天心である。

一八八〇(明治一三)年に卒業すると、文部省音楽取調掛に就任するが、横浜での経験で英語が堪能であったため、恩師のフェノロサが京都や奈良の古寺を調査する旅行に随行し、一八八四(明治一七)年には千古未開の秘仏とされていた法隆寺夢殿の本尊である救世観音菩薩像の開帳にも立会った。さらに一八八六(明治一九)年から翌年にかけて、東京美術学校を創設するためフェノロサが欧米の美術事情を視察する旅行にも同伴した。

### 大家となる多数の俊才が入学

この視察旅行の成果として、天心が帰国した一八八七(明治二〇)年に東京美術学校が創設され、二年後の一八八九(明治二二)年に開校、

場所は上野公園に一八七七(明治一〇)年に開設されていた「教育博物館」の館内に併設された(図2)。天心が初代校長となったが、

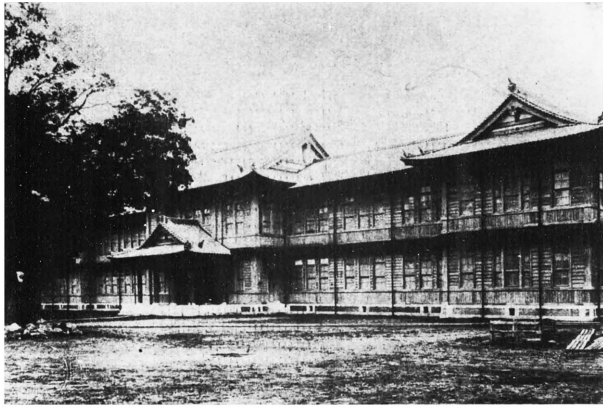


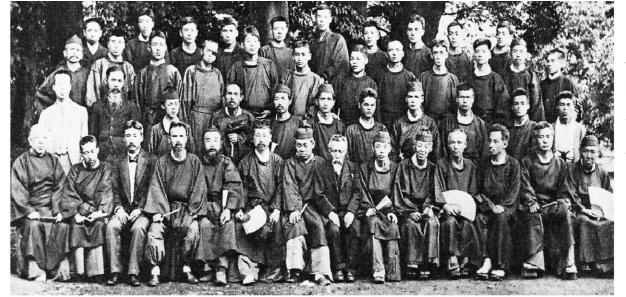
図2 大正時代の東京美術学校

画家ではないので、実技の教育はできず、開校初期の教官は江戸幕府の御用絵師であった橋本雅邦や仏師が本職の高村光雲などであった。

早速、入学試験を実施するが、全国各地から応募があり、試験に合格した五〇名と地方の官庁から推薦された一五名が最初の学生となった。教師には前述の橋本雅邦や高村光雲以外に、川端玉章、狩野友信など伝統美術の絵師などが就任した。その教育内容も絵画や彫刻だけではなく、漆工や金工や鍍金など日本の伝統工芸も対象となり、初期に卒業した生徒も横山大観、下村観山、菱田春草など日本画家が主力であった。

この日本最初の美術学校の創設を目指した天心の意気は生徒の着用する制服の意匠を東京帝国大学教授で恩師である黒川真頼に依頼したことに象徴される。黒川は幼少時代から博覧強記で有名な学者であるが、当時の洋風を強引に導入する文明開化の風潮を遺憾としていたため、聖徳太子の彫像を参考にして飛鳥時代の官服のような衣装を提案した。当時

図3 初期の制服



の東京美術学校の記念写真には、その制服を着用した生徒が記録されている(図3)。

天心は学内での授業はしなかったものの海外で活躍し、一八九一(明治二四)年には、コロンプスがアメリカ大陸を発見してから四〇〇年を記念してシカゴのミシガン湖畔で一八九三(明治二六)年に開催された「世界コロンプス博覧会」の評議員となり、日本政府が出展する鳳凰殿の模型を製作しているし、

政府からの要請で清国に出掛け、河南省洛陽市に存在する龍門石窟(現在にはユネスコ世界文化遺産)(図4)の調査もしている。

### 辞職して日本美術院を創設

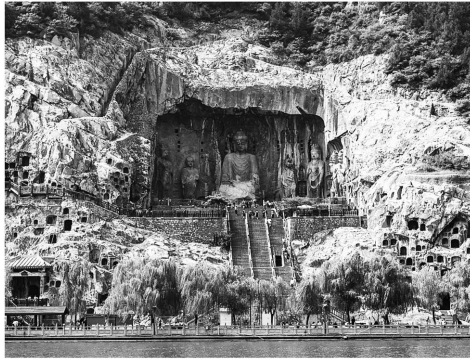
しかし奔放な性格の天心は自身を支援して校長に推挙してくれた駐米全権公使九鬼隆一男爵の夫人初子と複雑な関係となり、初子は離婚、天心は妻子と別居という事態となった。その結果、非難された初子は発狂し、天心は一八九八(明治三一)年に排斥されて東京美術学校を辞職することとなり、橋本雅邦など一七名の教師も辞職するという事件に発展した。しかし当代の著名な画家が連帯して辞職したことが天心の偉大さを証明することになった。

このような評価を背景に、天心はスウェーデンやアメリカの富豪から多額の寄付を受領不振となり、天心は一九〇五(明治三八)年に茨城県の太平洋岸の五浦に日本美術院の絵画部門を移設する。しかし、その時期から天心はアメリカのポストン美術館の中国・日本美術部長に就任したため活動は停止したが、横山大観や下山観山などが中心となって日本美術院を再興し、終戦直後の一九四六年に本拠を東京の谷中に移設し、現在は日本を代表する美術団体として活動している。

### 四冊の名著を英文で執筆

このような天心の活動は大名や金持ちの趣味であった美術を一般社会に拡張したという意義があるが、それ以上に英語の得意な天心が英文で著述した四冊の著作によって、日本の精神を世界に広範に浸透させたことが重要である。最初に出版されたのが『東洋の理想』

図4 龍門石窟



して、わずか半年で東京の谷中に日本美術院を創設した。天心は存在を誇示するため、天心に同調して東京美術学校を辞任した横山大観、

橋本雅邦、下村観山、菱田春草などが傑作を発表する日本美術院展を開催して世間に訴求した。一方、東京美術学校も交替して校長になった正木直彦の努力によって組織や制度の改革が実行され、安定した学園になった。

ところが日本美術院は三年が経過して経営

(一九〇三)(図5)でロンドンのジョン・マレー書店から出版された。冒頭の「アジアは一つ(アジア・イズ・ワン)」という有名な言葉はアジア各国の独立運動に影響したとされる。この出版の翌年の日露戦争が開戦した一九〇四年に発行されたのが『日本の覚醒』であり、前出のジョン・マレー書店とニューヨークのセンチュリー会社から出版された。日露戦争はアメリカでは一部の人々が「黄禍」と批判したが、その時期にアメリカに滞在していた天心は欧米のアジア侵略を「白禍」と反論し、日本の歴史を通覧して、日本の行動は東洋の精神文

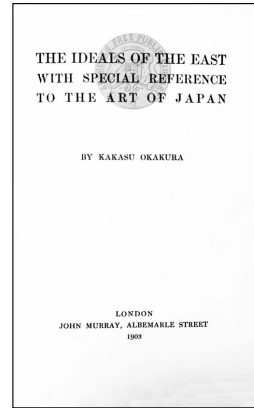


図5『東洋の理想』(1903)

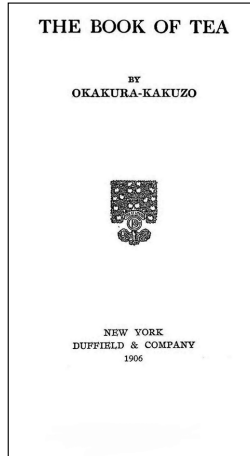


図6『茶の本』(1906)

は日本の戦闘精神が注目されていたが、建築、庭園、衣服、絵画などに、戦闘とは対極にある茶道の精神が浸透していることを紹介し、日本文化の本質を説明した内容で、これまでに邦訳が六〇万部も発行されている名著である。明治時代に開国した日本は江戸時代の二七〇年にもなる鎖国のため、当初は先進諸国から好奇の視点で関心が集中していたが、日清・日露戦争の勝利により軍事大国として評価されるとともに警戒される一方、世界最古の歴史のある文化国家としても注目されてきた。その日本の本質を世界に周知させたのは、い

化の独自の発露であると主張した。この見解は欧米でも多数の人々から賛意が表明された。一九〇二年に執筆されていたが、完全な原稿ではなかったため、天心の死後に草稿が発見され、一九三八年に出版されたのが『東洋の覚醒』である。執筆当時はイギリスが支配していたインドに滞在していた時期で、インドの独立に奮闘する青年たちへの檄文であり、「アジアの兄弟姉妹よ！現在の東洋は情弱と同義で、住民は奴隷の別名である」というような過激な表現が頻出している。日本では批判する意見も存在したが、天心の心情を発露した文章である。

しかし、四冊のうち有名な書物は『茶の本』(一九〇六)である(図6)。題名から連想されるような茶道の解説ではなく、茶道の精神を背景に日本の文化の深奥を解説する内容である。日清・日露戦争の勝利によって、世界で

ずれも英語で執筆された新渡戸稲造の『武士道』(一八九九)と岡倉天心の『茶の本』であると過言ではない。しかし、第二次世界大戦後に日本が敗戦から驚異の復活と発展をした時期には、E・ヴォーゲル『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(一九七九)、C・プレストウイツ『日米逆転』(一九八八)、K・ウォルフレン『日本／権力構造の謎』(一九八八)など外国の識者の見解が世界に流布したが、それらは特定の意図をもって執筆された内容である。日本の世界での位置が巨大な転換をしている現在、天心のような人物による日本の本質の紹介が期待される。

つぎおよしお

一九四二年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て東京大学名誉教授。専門は通信政策、仮想現実。趣味はカヤックとクロスカントリースキー。著書は『縮小文明の展望』『先住民族の叢智』『転換日本』『凛々たる人生』『爽快なる人生』『意志ある人生』など多数。